

2024.7.1



毎年夏になると、日本では原爆問題がメディアで大きく取り上げられます。今年は特に、ウクライナ戦争に関連してロシ

アが核兵器の使用をほのめかしており、また春には「原爆の父」と呼ばれるアメリカの核物理学者オッペンハイマーを主人公とする映画が封切られたので、核問題に対する関心が一段と高まっています。私自身、核や原子力問題には現役の外交官時代から長年深く関わってきましたので、この機会に、79年前に広島と長崎に投下された原爆がどのような経緯で作られたか、その舞台裏に何があったのかを振り返ってみたいと思います。

「落とされた側」と「落とされた側」

まず、マンハッタン計

映画「オッペンハイマー」の国内用ポスター



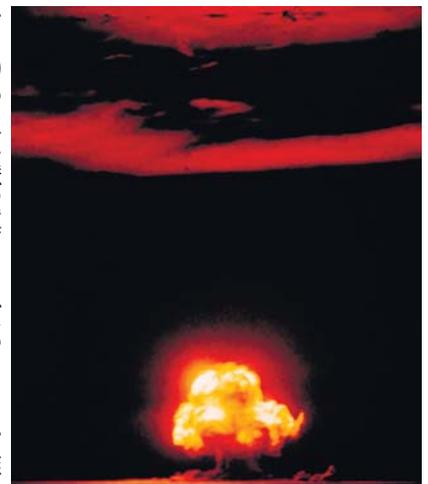
画で主導的役割を果たしたJ・ロバート・オッペンハイマー博士（1904〜67年）のことは、前記の映画「オッペンハイマー」（クリストファー・ノーラン監督）でもよく知られるようになり、またご覧になっていない方には、ぜひ映画館に行つて、大画面でみることをお勧めします。核爆発の大音響の

原爆はこうして日本に落とされた

オッペンハイマーとフランク

迫力はテレビ画面では到底味わえません。ちなみにこの映画は、北米圏では昨年7月公開され、実在の人物を扱った伝記映画の中で歴代最高の興行成績を記録。今年3月、米アカデミー賞授賞式で作品・監督・主演男優賞・助演男優賞など7分野で受賞に輝きました。

この映画の日本での公開が欧米よりも半年以上も遅れたのは、日本人のこの映画に対する反応について映画制作会社が懸念していたからだといわれます。現に、試写をみた広島、長崎の被害者たちからは、原爆の被害状況がほとんど全く描かれていないことに強い不満の声が聞かれます。



世界初の核爆発となった「トリニティー実験」(ウィキペディアから)

でB29から原爆が投下されたところで突然画面が変わり、次に現れたのは、10年以上たった広島で子どもたちが元気に遊んでいるシーンでした。その時私も強い違和感を覚えました。それを言うのはお門違いだと今は思っています。ただし、アメリカ人の科学者や映画監督たちが被爆の悲惨な状況に直接触れたがらないのは、それを知らないからではなく、むしろ知り過ぎていくからとみるべきでしょう。被爆状況は占領時代に米国の多数の専門家が徹底的に現地調査し、克明な報告書を作成しています。当然ながら彼らも良心の呵責(かしゃく)を感じてはいるのです。

(2面に続く)

### オープンハイマーの戦後の苦悩

そのことはさておき、上述したようにこの映画

は、オープンハイマーの波乱万丈の前半生と、一転して戦後の苦悩や葛藤を、さまざまな同時代人との複雑な人間模様の中で丁寧に再現しようとしたもので、その点では見事に成功していると言えます。

オープンハイマーは、アインシュタイン、シラードなどと同じくユダヤ人で、第二次世界大戦前に、ヒトラーのナチスドイツを恐れ、米国に亡命していましたが、ドイツが先に原爆製造に成功することを恐れ、マンハッタン計画に参画したわけです。

しかし、戦後はこの原爆技術が拡散し、国際的な原爆開発競争が起こることをいち早く予見し、その「パンドラの箱」のふたを開ける役割を果たしたことを強く後悔し始めます。原爆が当初の攻撃目標であったドイツではなく、日本に投下されたことにも道徳的責任を感じていたようです。

この映画の中でも描か

れていますが、原爆投下直後彼はホワイトハウスに招かれてトルーマン大統領に会います。その時のシーンが、はなはだ印象的です。

トルーマンがにこやかに「おめでとう！」と握手を求めたのに対し、オープンハイマーは暗い表情でこんなことを言います。「閣下、私の手は血塗られたように感じます」

トルーマンは苦笑を浮かべてこう答えます。「ピロシマやナガサキが恨むのは原爆を作った者ではなく、落とす決定をしたこの私だ」

オープンハイマーはそれ以上多くを語ることはない。

く立ち上がって退出するのですが、彼が部屋を出るときにトルーマンは、秘書に向かつて、聞こえよがしに大声で「あの泣き虫を二度とここへ寄せな」。

### 水爆開発をめぐる内部確執

オープンハイマーは戦後、核開発競争が国際的に加速化することをいち早く予測し、警鐘を鳴らすとともに、水素爆弾の開発には強く反対しました。

原爆製造ですでに十分国家に貢献したと考え、オープンハイマーは、原爆より桁外れに強力な水爆の開発には反対の立場をとりました。

一方、ルイス・ストロース（元銀行家。戦後創設された米国原子力委員会の初代委員の一人、の

ちに委員長）やエドワード・テラー（核物理学者）らは水爆製造を強く主張します。

こうした両者の水爆問題をめぐる陰湿な対立は映画でも詳しく描かれています。結局この内部抗争に敗れたオープンハイマーは主導権を失い、失脚。トルーマンは1950年に水爆製造を正式に指令します。

オープンハイマーは、戦後プリンストン高等研究所の所長に就任しますが、マッカーシー旋風による「赤狩り」の標的にされ、共産主義者たちと

ほしいのは、原爆の日本への投下に敢然と異議申し立てをした良心的な科学者が少数ながら存在したという事実です。

周知のように、マンハッタン計画に参加した科学者の中には、大戦直前か初期にヨーロッパから米国に亡命した多くのユダヤ人学者がいました。

シカゴ大学の冶金研究所で所長をしていた彼は、マンハッタン計画への参加を打診された時、

## 原爆はこうして日本に落とされた

の内通の疑いで1954年に公職から追放されま

す。その後は、かつて国民的英雄視された大科学者にしては不遇な晩年を送りました。1967年に62歳で他界した後、50年以上経った2022年になって、ようやく内通

容疑が撤回されました。

### 日本への無警告投下に反対したフランク博士

ところで、この映画では正面から取り上げられていませんが、日本人として、ぜひ知っておいて

したので、にわかに日本への投下案が浮上し、米政府の上層部で極秘裏に議論が行われていました。

そのことを察知したフランクは、マンハッタン計画参加の一部の科学者に呼び掛けて日本への無警告投下に反対する提案、いわゆる「フランク報告（The Frank Report）」を正式名称は『政治的・社会的問題に関する委員会報告』を取りまとめ、45年6月11日付けでスティムソン陸軍長官に提出。この報告書への署名者は、フランクの

ほか、プルトニウムの発見でノーベル賞を受賞した、後年原子力委員長になるグレン・シーボーグを含む計7名。まさに「七人の侍」です。

報告書のポイントは、原爆をいきなり日本に投下せずに、まず砂漠か無人島のようなところに、日本政府の代表を含め各国の代表を招き、そこで爆発させる。その後日本の対応などを見て次のステップを決定するが、最

最終的に日本に投下する場合、核不拡散問題の専門家、クリントン大統領の科学技術顧問を務めたことにもあります。日本の再処理・プルトニウム計画にも批判的な意見の持ち主として知られていま

す。私は30余年前、故伏見康治博士（名大・阪大名誉教授、参院議員、世界平和アピール7人委員会委員）のご紹介でヒッペル教授の知己を得、プリンス頓で会った際に祖父フランク博士の思い出話を聞きました。

ちなみに、フランク博士を中心とするマンハッタン計画参加科学者たちは、戦後、核廃絶、核軍縮を願って結集し、「原子力科学者会報」という専門誌を創刊しました。現在も続くこの雑誌の表紙は、人類が核戦争勃発の危機（破局）に至るまでの時間を示した「世界終末時計（Doomday Clock）」で有名です。この雑誌には、

### フランク博士の子孫たち

最後に、後日談めきまですが、フランク博士のシカゴ大学時代の教え子で娘むこのアーサー・フォード・ヒッペル（1898〜2003年）はマサチューセッツ工科大学（MIT）の物理学教授。私もヒッペル氏に頼まれた日本の「非核三原則」の長男のフランク・フォード・ヒッペル（1937〜）もプリンストン大学の物理学教授で、核軍縮したことがあります。



フランク博士(同)

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元国連環境計画（UNEP）アジア太平洋地域代表、日本国際問題研究所研究局長、元外務参事官。退官後東海大学教授（国際政治学）、現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、87歳。kaneko@eeec.com.org

この映画の中でも描か